

帰郷、そして帰郷

今江町 松倉博祥

(一)

五十里四季子が五歳の時、母に言われた。

実の父が戦死し、ルソン島から傷痍軍人となって帰国した叔父が、今日から父なんだと。

生来の怠け者なのか、身障をいいことに、怠惰をほしのままにする継父を四季子は好きになれなかった。いかにも軍人らしい凛々しい遺影の父が余計に恨めしかった。

不幸は、母親が列車に轢かれて死んだことから始まった。

多感な高校一年の四季子には耐えがたい試練だったが、胸の膨らむ恋心に救われた。

女生徒に人気猪飼という新任教諭が好きでならなかった。

猪飼の父は、いわゆる「アカ」の思想を曲げず、出征を前に自決した。アカだ、非国民だと親戚縁者にまで罵られるも猪飼は、

早稲田を出て念願の教師となった。だが、半年後、気丈な母親が癌で急逝すると、親類はどこまでも冷淡で、天涯孤独を思い知らされる。

そんな時、斬新な教育改革を目指す大学の恩師が、熱心に協力を要請してきた。

猪飼は心機一転、新天地での再出発を決め、父母の骨壺まで抱え持って、故郷を捨てることを決めた。

猪飼が去った後の四季子の憔悴たるや、まさに重病人そのものであった。

その折、信じがたい悪夢に見舞われたのである。猪飼の想い人というだけで周囲から攻撃を受けた。大事に至らずに終わったが、身の危険を感じる行為は絶対に許せなかった。

傷心と屈辱は、四季子を自死に走らせた。それもすんでの所で助かったものの、失恋の沙汰としての噂は、四季子を追い詰めた。

その噂を裏付けるべく、禁断の恋を成就させようと、四季子は九州への逃避行を決めた。

覚悟は、家族との断絶であり、二度と再びこの地を踏まないことであった。

唐突な四季子の来訪は猪飼を驚かせたが、学園のスタッフの温かい歓迎と理解を得てふたりの人生が始まった。

そして七年の時が流れ、一男二女に恵まれたが、不幸は予告なしに突然やってきた。

四才の長女が車に轢かれて死んだ。

加害者は他ならぬ学園長で、しかも飲酒運転であった。聖職者の園長は、生きてはおれなかった。園長が亡くなると志願者も激減し、学園の継続は難しくなった。それに園長の理念を死守する猪飼の孤軍奮闘も空しかった。

スタッフは夫々致命的な挫折感を持って離散、そして学園は閉園を余儀なくされた。

猪飼は、鹿児島市内の私立高校の教諭となり、鹿児島から二十キロ程離れた始良の町に移住し、再スタートを切った。

それから十数年、長男の湧貴は大学を出て大阪の商社に、次女も鹿児島島の銀行に就職し、猪飼夫婦は平穏な日々を過ごしていた。

それなのに今度は猪飼がダンブカーに追突される。本人は右手足の自由が利かなくなる重症を負い、同乗していた二十三才という娘盛りの次女が一週間後に息を引き取った。

流石の四季子も、滂沱の涙に暮れた。

挙句に、猪飼はまるで人が変わってしまった。

仕事も出来ず、不満と怒りを貯め持つて、苛立ちが治まらず、飲酒も喫煙も日毎尋常の度を超していく。身体のもどかしさに、閉じこもり、俯きながら時には暴言まで吐いた。

それが三年も続いた。

天涯孤独といながら、彼は両親をそばに置いている。しかも、時には両親の骨壺を抱えるようにして背を震わせている。

それを見ると、墓参も叶わぬ自分が惨めに思えて、僻んだりもする四季子であった。

自業自得だが、何十年も自分の両親の墓参りをしたことがない不義理が後ろめたかった。

自堕落な猪飼を見るたび、見たくもない継父の姿が重なって寒気さえ覚える。

悲劇が度重なれば、ひとも変わってしまうのも仕方ないが、彼には立ち直って昔に戻って欲しい。彼は、優しい人間であった。本当に優しいというのは、人を守り抜く強さを持っている筈だから。

息子だつて鹿児島に帰ってきて、一緒に泣いてくれればいいのに。

継る者もないこの時に乳癌と言われた。

だが、四季子のためらうことなく全摘手術を決めた。その妻の悲壮な決意を聞いた猪飼は、流石に目が醒め、身障と高齢を飲み込む筈のない求人情報を、目を皿にして覗いた。

四季子は、昔に帰ろうとする彼の姿勢に感謝した。そうして、二人は昔の穏やかな生活を取り戻すことになる。

同級生の国枝直樹が、四季子を訪ねて来たのはそんな頃だった。三年も前から鹿児島に単身赴任していたその彼は、夏のある

日、検査入院した病院で、「イカリシキコ」なるアナウンスを耳にして驚いた。珍しい名の同級生を思ったが、まさかと首を振って診察室に向かった。

それからひと月程あとに、始良の駅のホームで彼女の姿を目にしたのだが、国枝は走る電車のなかだった。悄然とした彼女の姿がやけに気になった。

「四季子だ！」と確信した国枝はこの奇遇を捨て置けなかった。始良市の電話帳を繰ると、「イカイ」があるが「イカリ」はない。

だとすると「イカイシキコ」かもしれない。

「猪飼隼人」の住所を直接訪ねることにした。

案の定、表札には「猪飼隼人・四季子」の名前が並んでいた。

生憎、四季子は通院治療で留守だと、足を引き摺って旦那が出て来た。

その彼は「入善から来た」と聞かや、優しい風貌を一変させて、何故か刺々しくなった。

「同郷の者に関わりたくない」というのが夫婦の共通認識で、「四季子には会わないでくれ」とまで言われた。その口調に気圧されて、やむなく断念することにした国枝は、それでも名刺を置いて猪飼の家を辞した。

念のため、来月には富山に帰任する旨を伝え、帰省地の住所を走り書きして置いてきた。

四季子は、自分の決意は他人によって崩されなくなかったから、里心が付くような国枝に会わなくて良かったと思っただけでも国枝のその名刺は捨てきれずにいた。

そして自分の不幸続きと親不孝を傷みながら、いつか遠い故郷の地図を紙に描いていた。

同級生の家々をマーキングしながらタイムスリップした顔や場面を思い出したが、不思議と涙は零れなかった。改めて何十年もの緊張と意地を確認したつもりだった。

とはいうものの、国枝の再訪を期待したりする自分に苦笑することもあった。

思えば、戦死した父と事故死した母が眠る墓をお参りした覚えがない。父の違う弟やあの継父もどうしてるか分からない。そんな不義理も悔やまれ、入善が懐かしくなった。

そして会うことのできなかつた国枝に宛てて、四季子はモジリアニの「瞳のない婦人」のイラストを模した年賀状を仕上げた。その昔、文芸部の顧問だった猪飼が紹介してくれた太宰治の「人間失格」を思いだした。

その破滅的な太宰治と退廃的なモジリアニとの生涯がオーバーラップして、モジリアニの「お化けの絵」のくだりを皆が目にした。懐かしくて寂しい彼の絵が好きになった。

特に首を傾け、瞳が描かれていない婦人像に惹かれた。その女性性は、密かに抱く望郷の想いを、永遠に覗き込んでいるようだという評に、皆が感嘆したものだ。

そして四季子は、瞳のない女性に託して、やむなく故郷との縁を覚悟した自分の本音をメッセージジしたいと思った。国枝に理解されなくても、自己満足でいいのだ。

賀状を投函した四季子は、役目を終えたような安堵と新たな覚悟を胸に刻んだ。

「生まれ故郷を捨てた私は、自分が選んだ人との鹿兒島で生きてそして死んでいく」

四季子の賀状を見た国枝は、その昔、同じ同級生の中川から貰ったものと余りに似ていたのでびびくりした。それでも優秀だったふたりの共通の感性が感じられて、嬉しくなった。そしてその夜、少女に戻った四季子が入善に帰って来た夢を見た。

(二)

寺田純一は香林寺の前の狭い道を三十キロほどのスピードで走っていた。突然山門から飛び出て来た男に驚いて急停車した。

ところが慌てて後退りしたその男は、足がもつれてそのまま仰向けに倒れてしまった。

車に衝撃はなかったが、純一は転倒して動かない男をそのまま放つてはおけない。

どうも頭を石碑の角にでもぶつけてしまったらしい。男の歪んだ表情がそのまま沈むように微動すらしなくなった。頬を叩いても反応はなく、麻痺したように手も足も動かない。

瞳孔を開いたままの目を見て純一は慌てた。取りあえず、救急車を呼んだ。

診察室のベッドに運びこまれた青年の意識は戻らないままである。純一にとっては初めて遭遇する緊急の医療現場であった。小太りの無骨な面相の中年医師が、対応してくれた。

「頭蓋骨部の損傷は軽そうだが、頭のことだからよく診てみないと何とも言えない」

意識の無い青年は、そのまま運ばれていった。

急いでいた訳でもなかったのに、近道だからとあの道を選んだのが悔やまれた。

純一が、助けを求めたのはやはり父だった。

父はすぐ駆けつけると言ってくれたが、富山から入善までは少なくとも四十五分は掛かる。

昏睡状態の青年から言質も取れない警察も、純一の証言だけで事の顛末を結論することもできないでいた。それに事故現場には、手掛かりとなるものは何もなかった。原因や経過を纏めるにはそれなりの時間を要することになる。

ベッドに眠る男は、四十位の眉目秀麗のイケメンである。ユニクロの臙脂色のブルゾンの下には濃紺のカシミアのセーターを着ていた。そして穴の開いた流行りのブルージーンズとナイキのスニーカーを履いている。ニコンの一眼レフのカメラを提げていたが、バッグもリュックもなく、不思議なことに携帯も見当たらない。

ブルゾンの右ポケットからは三万弱の現金の入った財布とスパーのレシートがあった。

さらに内ポケットからはきちんと畳んだA4サイズの手描きの地図が出て来た。

左ポケットから旅館の領収書が出て来たので、警官はそれを持って沢井旅館に走った。

女将は、数少ない客の印象を、はっきりと覚えていた。年の程は四十才位、温和な好青年で、長身瘦躯つまり背丈の高い華奢な身体つきだと言うのも当事者そのものだ。

宿泊名簿には「氏名川田五郎 住所 兵庫県宝塚市」とあったのでそのまま宝塚署に問い合わせた。確かな住所ではあるが、名前や電話に該当するものはなかった。

さらに女将は、一時預かりのリュックサックを取り出してきた。担当の仲居は午後から休暇を取っていたので、なぜ預かったかは分からないという。

リュックの中には清酒「黒部川」と赤と青の蒲鉾が六本入っていた。他は着替えの下着だけで、手掛かりとなるものは何もなかった。

清酒「黒部川」は、すぐ山田酒店で買ったことがわかった。店主は、見慣れない若者だったが、特別変わった様子もなかったと言う。

コスモというスパーのレジ担当も、不審に残るような記憶はないと言う。真空パックでもない蒲鉾を六本も買ったというのは手土産であるが、宝塚が住いなら日帰りできる。

只不思議なのは、所持品に携帯やカードがないことである。今どき携帯を持たない筈はないから、どこかで紛失したか、盗難に遭ったのかもしれない。だが今のところ、事故や事件の情報はないし、特別な目撃情報も出てきていない。警察は眠る青年の写真

を撮り、所見をメモして宝塚市の所轄へ電送し、引き続き捜査を依頼した。何とか男の保護者を連れてこなくてはどうにもならない。

陽も暮れかけた頃によく、純一の父寺田敏雄が到着した。敏雄は、狼狽えるだけの息子に「大丈夫だ」としか言えない。根拠もない慰めは、反って純一を不安にさせた。

一応の経過を聞いた後、敏雄は手描きの地図に見入った。

駅前からの真っ直ぐなメイン道路が描かれてないが、昔ながらの斜めの道路があって、行き着く所のT字路まで丁寧に描かれている。

町通りの呉服店や本屋や電機店など昔流行った店は、今は違う店舗に変わっている。

地図には、ビジネスホテルやコミュニティーセンターもない。となると三、四十年も昔の記憶に基づいた地図と思われる。

注目は、赤いサインペンでマークされた家々である。四方に跨つて点在する家には波佐間、八田、木原、国枝、金城などそれぞれ苗字が記入してある。どうも自分たちの同級生ばかりだ。だとするとこの地図を書いたのは同級生の誰かに違いない。

恐らく、手掛かりはこの地図にある。そう思った敏雄は、知恵を借りるため同級生に来て貰うことにした。

赤いマークを見た波佐間が大声をあげた。

「我々同級生の家ばかりじゃん。しかも四、五十年前前の町じゃないか」

転校した者や音信不通の者を列挙したが、その数は三十人近くで一割を超える。そのうち十二名が物故者だ。該当者を絞り切れずに、名を挙げては昔話に及んだりした。

陽が沈む頃、青年は「急性硬膜下血腫」と診断が下された。脳

に損傷があり、脳と頭蓋骨の間の出血が、強く脳を圧迫し手術が必要かもしれないという。もしかすると記憶障害や判断力の低下などの後遺症を残すこともあるという。皆、医師の説明はよくわからないものの、症状が深刻であることは分かった。

だから尚のこと、身元引受人を必要とする。そこに辿り着けない警察も焦りを隠せない。

それだけに不安も増す寺田親子は一睡もできなかった。それでも翌朝、医師から「幸いに峠を過ぎた」と聞かされホッとした。

交通事故でなく、転倒による脳挫傷と言われたが、成り行き上の責任を思うと、やはり寺田親子の気持は晴れなかった。それでも、川田五郎はその日の夜、丸一日の昏睡からようやく意識を戻した。ところが受け答えがまともではない。自分の名前も住所も口に出せず、絞り出すようにしても思い出せないでいる。心配した記憶障害が残ったようだ。

益々焦りを募らせた寺田親子は、カメラの写真に何らかの手掛かりを期待した。

純一は、パソコンにカメラの画像を転送し、次々スライドして見た。

まず青い空に樹氷が光る風景の写真が数枚あった。高原か山ではあるが、建物や道標など地名に繋がるものは何もない。

次に老夫婦のスナップが十枚程あった。

それらは盗撮したみたいに、撮影を嫌って逃げる老婦人を追うようなもので、しかも顔はぶれていて判然としない。だが、横顔がはっきりしたものが一枚あった。しかも、その顔は川田五郎によく似ていて父親と思われた。

その二日後の日付けで錦帯橋、厳島神社、原爆ドームが写っていた。

そして数日後には車窓の立山連峰と入善町の商店街と一般家屋

が撮られていた。

皆の推測が始まった。

少なくとも錦帯橋より西、つまり九州が移動の始発点とみた。樹水が見られるのは雲仙や阿蘇、霧島高原だが、此処と絞り込むものは何もない。ならば老夫婦のスナップから、正体と住所を覗うものを探すべきでない。電柱の「松原町」と言う文字が読み取れた。

しかし、ありふれた町名からは、県や市なども特定できない。別の写真をズームすると「〇良市中央図書館」とあった。だが最初の文字が半分欠けている。偏は全く見えず、旁も判然としないが、どうも「合」のようである。

〇良市といえば奈良市だが、当然当てはまらない。思い浮かんだ佐良や相良という地名を探すと、全国あちこちに点在していた。ところがいづれも「市」ではなく町や村である。

折角見つけた熊本県の相良も、球磨郡相良村であり、対象外と言わざるを得ない。

さらに純一は、旁が「合」と言う漢字や「合」で構成される漢字などをネットで検索した。

アイ・コウ・ゴウと出て来たそれぞれの字を「良市」に冠してみる。始良市、恰良市、裕良市、どれも見たことも聞いたこともない。

相談した警察官も良く分からず、恐縮して「調べてみる」と引き取って行った。

(三)

猪飼湧貴は、母の反対を押し切って九州を離れ、同志社に進学し、就職も大阪に決めた。

そして恋愛結婚をして一女に恵まれたが、あのJ R福知山線の

脱線事故で妻子を亡くしてしまうことになる。

湧貴は、妻子の胸腹部圧迫による窒息死（圧死）という惨い遺体を目にした時、悲嘆と憤怒とで心が乱れた。妻と子がさよならも言わずに死んでいった事実には、残酷な恐怖と無力感に苛まれた。白日夢や不眠に見舞われ、躁鬱を反復し、憤怒の制御も効かなくなる。

その症状は明らかにPTSD（心的外傷後ストレス傷害）であった。それでも奇跡的に一か月近くでASD（急性ストレス障害）と診断され、三か月後には職場復帰したのである。

そして翌年二月、金沢への転任が決まった。

それを聞いた母の四季子は、妙な胸騒ぎを覚えたものだった。

赴任の前に両親に会うため、湧貴は九州に向かった。

二月の半ば、家族三人で訪れたえびの高原は、白銀の樹水で被い尽されていた。

対照的な空の青さが目に痛い程で、気分はすっかり子供に戻っていた。少年の頃住んでいた高原だが、これほど輝いて見える景色は初めてであった。

強い風がつくる青空の筋雲に、自分の悲運も恐怖も掃き清められるような気がした。

自分の前を行く両親を見ながらゆっくりと歩を進める。年金生活となった両親は老いも目立つが、相変わらず仲睦まじい。背丈の差は三十七センチほどもある二人が、樹水の輝きに感嘆の声を交わす光景が微笑ましい。

傷心の湧貴を囲んでの家族は、何処かに置き忘れていた温かい団欒を取り戻していた。

唯その寛ぎの中でも湧貴は、始良が自分の生まれ故郷だという確信が持てないでいた。

両親も「生まれ故郷に未練はないけれど、鹿児島にどうしても

馴染めない」そう言つて頷き合つていたのを知っている。

湧貴もえびので生まれ桜島の煙を見て育つた筈なのに、何故か帰属意識がないのである。

それは人生の節目でいつも疑問に思ふテーマでもあつた。

一方の四季子は、不幸の連鎖を断ち切れない自分の運命を呪わしく思つていた。

手足をもがれるように家族が次々と亡くなつていった。それもふたりの娘に、嫁と孫、みんな女性でしかも皆、交通事故死である。

家族の死に直面する度、神の恐れや仏の崇りに身を震わせたが、今度ばかりは、もう立ち上がれない気がした。成るならば薬の力を借りてでもこの怖れから逃れたかつた。

故郷を離れ、何十年も墓参りもしたことの無い後ろめたさが、再び思い起こされた。

故郷を捨てた因果応報だろうかとも思う。

しかも皮肉なことに、息子の湧貴が辞令を貰つて、あの北陸に赴任するというのである。

「金沢といえば、富山は隣だね」

「言つておくが、入善には行かなくていいよ」

両親が口を揃えてきつぱりと言つた。

話の腰を折つて背を向けたふたりに、湧貴は口を噤んだ。

それでも夜遅く、猪飼は自分の生い立ちと九州に來た決意を話した。

四季子も家族の事情や父との関わりをこと細かに言つてくれた。

周りの無理解や非難そして偏見や蔑視を許せず故郷を離れたという。

だが「捨てて忘れた故郷は、消えてしまった訳じゃない」と、ポツリ四季子は呟いた。

湧貴は、母のその言葉に、故郷への未練を覗き見た気がした。

そして、母が何気なく描いたという地図をこつそり持ち帰つた。その地図を見ても、当然想いを馳せる記憶はない。それでも自分のルートでもある入善町を一度訪ねようと思つた。

そして、九州から大阪を素通りして金沢に赴任した。転居の荷解きが終わつても、仕事のスタートにはまだ二日の余裕があつた。

湧貴は、これぞ与えられた機会と、入善を訪ねることにした。

金沢からは急行で二十分、富山で鈍行に乗り換える。富山を出た頃は、小雨が車窓のガラスに斜めの線を引いた。

ところが明るさを増した車窓には、低い雲も掃き捨てて立山連峰の姿が現れたのである。

待つてたかのような幕開けに感動した。

このような雪の山岳が連なる光景を目にしたのは生まれて初めてだった。高原に生まれ育つたが、三千米級の山脈を見るのは初めてだった。釘付けになつた湧貴の心は躍つた。

隣の学生が「あれが剣岳です」と指差した先に、とてつもない白い山が出現した。

鋸を逆立てたような山は、仁王立ちの迫力であつた。身を乗り出した湧貴に、その学生は、軽く会釈して次の駅で降車していった。

やがて列車はあの黒部川を通過し、そして入善駅に到着した。改札口を抜けて駅舎の前に立つ。

左右にきちんと別れた二本の道路を従えて大きな道路が一本、真つ直ぐに伸びている。

母の地図にもない、新しい道のようにだ。

降車した人々はそれぞれ三方に別れ、その人影はたちまちに消えてしまった。

湧貴はやおら、正面の道を歩み始めた。

メモ地図にある波佐間や国枝、金城という住まいは、美容院や洋服店そして駐車場になっていた。だが住人や店舗が変わっていても市街地を巡る道路は殆ど昔の儘のようである。

齒科医院や理髪店に挟まれて「五十里」の家はメモ通りに現存していた。

湧貴は「これが母の生家か」と、足を止めてじっくり眺め、カメラに納めた。

色褪せたカーテンや破れ障子の窓は、固く閉じた玄関戸と同じで、住む者のない空き家だと証している。果たして継祖父や叔父は何処に移り住んでるのだろうか。湧貴は、母の生家とは言え勝手に入り込む勇氣はなかった。

それに母は望まないだろうから、彼らを探すのも又の機会にと先延ばしすることにした。

通り縫りのオバサンが不審げに見つめるものだから、その場を慌てて離れた。

旅館の宿帳には、でたらめな氏名、住所を書いておいた。五十里四季子の息子と分かつてはならないと思ったからだ。

そして案内された部屋でお茶を口にした時に「携帯がない」とに気が付いた。

心当たりは列車の中しかない。駅に問い合わせると、幸い、終着の糸魚川駅に遺失物として保管されているという。

今日一日、携帯がなくても事足りると思ひ、明日、引き取りに行つて、そのまま金沢に帰ることにした。

(四)

翌朝、旅館から東に向けて八田という家を探した。地図の通りに行き着いたが、一帯は立派なショッピング・スクエアとなつて

いた。

この確認は「無駄足だった」と踵を返して沢井旅館に戻った。一旦チェックアウトしたものの、今しばらくリュックを預かつてもらつて、近くの香林寺に向かった。

香林寺は、木骨土造の塀を巡らし、その築地塀の壁面には白い水平線が引かれていた。定規筋と呼ばれる三本の線は、小さな町ながら格式あるお寺だという証でもある。

その山門を踏み入ると、本堂を前にした庭に、左右に二本、とつともなく大きな銀杏の樹が空を突いている。寺の格式と歴史を誇示するその幹は、大人ひとりでは抱え切れない太さである。

左手には鐘楼があつて、銀杏の枯れ枝が突然の風にざわつくと、微妙な音が漏れて、あたかも鐘が呻きの音をあげたかのようにである。

お寺の中でこんな風に時間を過ごすことは生まれて初めてのことであった。

本堂の横にある墓地には人影もなく、昼とはいえ薄寒い風の流れの中で心細くなった。

その風は、煙と臭いは何処かへ運び去り、消え残りの蠟燭と線香を揺すつて通り過ぎた。

思ったほど広くもない墓地を隈なく探すと「五十里」の墓はすぐ分かった。それは、一番外れにひっそりと雑草に埋もれていた。素手で草をむしり取っていると汗が噴き出た。

しゃがんで、手を合わせると、墓碑銘と視線が丁度真向いとなる小さな墓であった。

「俺のルーツがここにあるのだ」

ここに自分の祖父母が眠っていると思うと涙が溢れ出た。とそ

の時、突然、思い出した。携帯電話を糸魚川駅まで取りに行かねばならなかったのだ。

「時間が無い！」そして駆け出した。

墓地から香林寺の境内を抜け、勢いよく山門を飛び出た。左手から来たクルマに気づいた瞬間、足がもつれ、仰向けに転倒し、傍らの縁石に頭を打ちつけた。

それからの記憶は一切なくなってしまったのである。まる二日過ぎて、湧貴の意識は定かでなかった。

同級生の「推測」は尚も続いていた。

その日、初めて顔を出した木原が「アイラカルデラってこの字だよな」と言い、「確か桜島火山だから始良って地名があるはずだ」と付け加えた。

「あつた、鹿児島県始良市。これは始良市立図書館だ！」

「おい、オシッコは九州にいるって話だよな」

「それに彼女はもう四十年も音信不通だし」

「この地図、オシッコが描いたがじゃないか」

通称シッコと言ったが、男の間では四季子はもっぱら「オシッコ」と言われていた。

寺田と波佐間は色めき立った。

そこに顔を出した国枝が言い切った。

「そうだ。オシッコだ！俺に覚えがある」

その頃、旅館の仲居が警察に来て大事なことを言った。

「お客さん、携帯を電車で忘れて、糸魚川まで取りに行くって言っていましたよ」

早速、糸魚川駅から取り寄せた携帯で、持ち主本人は猪飼湧貴であり、通信記録から母なる猪飼四季子とも確認が取れた。

そして当の青年が記憶を取り戻したのもまもなくだった。何もかも同じタイミングで明らかになった。

電話が鳴り響いて、四季子は恐るおそる受話器を取った。同級の国枝だと名乗ったその声は、やけに神妙であった。

「湧貴が転倒事故で入院してる」そう聞いた四季子の心臓は止まらんばかりになった。

転任を聞いた時の、あの不吉な予感が甦った。

「ここで息子の命が盗られたら、自分は生きておれない」

警察からも知らせがあつて、四季子は列車に飛び乗った。唯々息子の無事だけを念じ、列車に揺られていた。

五十年もの過去が、脳裏を迷彩色で走り回っていく。五十年も堪えて死守してきた自分の意地が空しく切なかった。

湧貴の顔を見るまで、四季子の視野には誰も目に入らなかつた。息子の無事が確認出来て緊張も溶けたが、涙は出なかつた。

「偽名を使ったりして・・・」と湧貴を叱った。

そして、その場にいた同級生の一人一人に礼を言った。皆、少年時代の面影があつて間違いなく名前を言い当てた。

「国枝くん、有難う」「波佐間くん、木原くんも」その昔、皆を「君付け」で呼んだマドンナの生き生きとした表情であった。

堂々と前を向いた四季子の顔には、五十年の空白はない。昔のままだったのは四季子だけかもしれないと、皆が思った。

自分が自分でありたいと貫く意思の強さはその人間の強さであり、大きさでもある。

実際には昔より小さい筈の四季子ではあつたが、同級生の皆には大きくなって見えた。

ただ、国枝だけは違う四季子を見ていた。

あの時、始良駅の構内を歩く彼女は、生活臭のある年寄りではなかつた。その彼女の憶えがちらつくから「無理せず泣けよ」と言つてやつた。

国枝には、五十年の空白を否定したくない四季子の無理が見え、緊張と意地とで尖った顔が、反って痛々しかったのだ。

その実、四季子は、実の弟に会った瞬間、号泣した。名乗らなければ分からない程、オジサンになっていた弟の顔に、あの母親の面影が残っていたのが嬉しかった。

継父は数年前に永眠したと聞かされた。

魔が差して自分に迫ってきた事実を、継父は自ら闇から闇に葬ってくれた。これで四季子は命を賭した悪夢も消滅し、五十年もの呪縛も解けたのである。

湧貴にやむなく連れ戻された感があつたが実の弟に会え、両親の墓参も出来た。

これで思い残すことはない。

帰郷は、永遠の決別を意味した。

そして今、鹿児島へ帰郷するのである。

そこには自分より先に逝った娘らや嫁と孫のみんなが、眠っている。